



ハート型の渡良瀬貯水池

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

小 学生の頃だったか。何かの本で、袴姿の老人が警官に取り押さえられながら、立派な馬車に向かって書状を突き出している絵を見たことがある。足尾鉍毒事件に苦しむ谷中村々民のために、田中正造が明治天皇へ直訴する場面だ。その時から谷中村や渡良瀬川は、足尾銅山と関連し、影を帯びて私の記憶に残ることとなった。

JR古河駅こがえきでおりて、三きキロほど歩くと渡良瀬遊水池の南端にたどりつく。総面積三三平方キロメの広大な遊水池の南側四・五平方キロメは、渡良瀬貯水池または谷中湖と呼ばれる貯水池となっている。これは洪水調節や都市用水の確保などを目的とした日本初の平地型ダムであり、昭和五十一年に着工して平成二年に運用が開始された。文字通り平地に建設されているので、とてもダム湖とは思えず、湖面の形も変わっていてハート型をしており、渡良瀬遊水池の七割を有する栃木県では、人と自然の楽園「ハートランド」としてPRしている。

しかし、この形は意図して造られたものではない。もともとは丸型に計画されていたが、渡良瀬遊水池の一部となって消えた谷中村の中心部を史跡として保存した結果、丸型がへこんでハート型になったのだ。

貯水池の周囲をめぐる谷中村跡を訪ねると、背の高いヨシ原が広がり、北海道の原野を歩いているような気分になる。現代の関東平野にこのような湿原があるとは思ひもよらなかった。ヨシ原を切り開いた道をたどれば、住民の屋敷跡や雷電神社跡などと記された標識が所々に建てられており、かつてここに谷中村があったことを伝えている。

渡良瀬遊水池が建設される以前、谷中村は川と沼に囲まれた渡良瀬川下流域の氾濫原に存在した輪中の村だった。この村に悲劇が襲ったのは明治二十三年の洪水によって、足尾銅山の鉍毒が渡良瀬川流域に水質・土壌汚染をもたらしたことによる。有名な足尾鉍毒事件のはじまりだった。

被害を受けた沿川の住民は足尾銅山鉍業停止などを求めて大挙上京し、内閣では事態の収拾を図るため、第一次、第二次鉍毒調査会を設置した。その第一次鉍毒調査会では足尾銅山へ鉍毒流出工事の施工命令が下されるが、続く第二次ではその予防工事の結果、足尾銅山からの鉍毒流出は少ないと判断され、渡良瀬川治水が重要な課題となった。

その治水法の一つは渡良瀬川を改修し、洪水をスムーズに利根川へ流下させることだった。しかし、これを行えば洪水が直接に利根川へと流れこむこと

になり、明治三十三年度から進めている利根川治水計画の大幅な変更が必要となる。そこでもう一つの渡良瀬川が利根川に合流する手前に遊水池を建設する案が採用され、谷中村周辺が適地として選ばれた。遊水池建設事業は明治四十四年から実施され、昭和三十八年からは洪水調節機能の増大を図り調節池化が着手された。そして前述したとおり昭和五十一年からハート型の貯水池の建設が始まり今に至る。



渡良瀬貯水池

【交通】JR古河駅より徒歩約40分／
東武日光線新古河駅より徒歩約10分